

「存在—神論」の根拠のために

藤井 敏

ハイデガーにおける形而上学の問題を考える場合、「存在—神論」(Onto-theologie)ということに直面するに至る。ここではその一端を取り上げ、少しく論究してみようと思う。ところでハイデガーをして形而上学にその思惟を向わしめた所以のものは、いったい何処に求められるべきであろうか。そしてこの思索家において形而上学とはいかなる仕方の問題となり、思惟されてゆくことになるのか。これらの点についてここでは言及できないが、次のように纏められよう。彼の思索は「存在の思惟」を通して形而上学というものの中に踏み入り、それを根本から問題にし、その内から克服しようとする歩みである。すなわち、伝統的な西欧の形而上学を単に排除したり、それに反対したり、それを否定しようとするのではなくして、自らこの哲学の中心的課題の荷負者として思索し、その根拠を明らかにしようとする立場である。単なる反対や否定は、そうすることによって、斯くされるものかから逆に規定されていることに他ならないからである。具体的に言えば、「形而上学とは何であるか」という問いから出発しつつ、形而上学を根本から問いに化し、「形而上学の根底の内への焔行」という謂わばそのもの処へ還り行くという仕方、それを克服しようとする道を歩む。このことが後期の例えば『存在の問いへ』

において、「耐え抜き(克服)」(Verwindung der Metaphysik)と呼ばれるに至る事柄である。そしてその底流をなすのが『存在と時間』以来の「存在の問い」であると言える。

古来、勝義の哲学はいうまでもなく「第一の哲学」すなわち「形而上学」として成り立ってきた。西欧の形而上学はハイデガーに従えば、「存在—神論」として性格づけられ、ヘーゲルに至るまで一貫した本質構制をなしている。この事に關しては既に論及したことがあるので今は省略する(『大谷学報』第五十七卷第二号七四頁)。さて、存在—神論という本質構制は慥かに西欧の形而上学全般を一貫しており、従ってまた「形而上学」は「存在—神論」であるというのも全くその通りである。しからば、形而上学は存在論であるが故に神論であるとはいっただいどういうことであろうか。存在論であるものが、神論でもあるとはいかなる事態を言うのであろうか。果して形而上学は存在論であると同時に神論でもあると言えるのであろうか。ハイデガーに従えば存在—神論ということの内には、「形而上学の本質に属する未だ思惟されてはいない、統一」(『同一性と差別』四五頁)が実は残されたままになっているのである。この吟味されるべき重大事を顧慮することなく、ただその特質の二面性よりしてのみ、形而上学は「存在—神論」なりと論断を下し、その事自体についての考察をそれのこと足れりと為すは些か軽慮の感を禁じえないであろう。しかしながら、そもそも何故に形而上学は「存在論にして神学」という本質構制において成立してきたのか、という問題は、形而上学の内では少なくとも十分には明らかにされてきていない。因って、

かかる本質構制を成す形而上学自身が、そこから可能にされるところの根拠が問題となる。このことは取りも直さず「還り行き」とか「歩み戻り」などといわれる仕方です行されることになる。

形而上学は存在を存在者について「存在者の存在」として思考し表象する。そこにおいては存在と存在者とが相互に保持し合い、相互に分有し合っていると考えられる。このような事態をハイデガーは「二重の襲」(Zweifalt)として捉えている。「この二重襲によって、存在者は存在において現成し、存在は存在者の存在として現成する」(『思惟とは何の謂いか』一三四頁)のである。つまり、存在を「存在として」ではなく、「存在者の存在」として問うところに、二重襲ということが看取れる。存在者について存在を「存在者の存在」という形で問うのが「形而上学」であるとするれば、形而上学とは「存在」と「存在者」の二重襲に基づいた一つの境域なのである(『上掲書』一三五頁)。かくして「存在—神論」という形而上学の「二重形態」(Zweifalt)、『道標』二〇八頁)とは畢竟、存在と存在者との二重襲に基づいている訳である。そうであるならば、形而上学は「存在」と「存在者」を取り扱う限りにおいて、存在と存在者のディフェレンツ(差別)に關与してはいる。がしかし当にそのことに因って、すなわち形而上学は存在を「存在者の存在」として思考し表象するという仕方です「存在」と「存在者」を扱う限り、形而上学それ自身の内には存在と存在者のディフェレンツを「ディフェレンツとして」思惟するような場合は欠落していると言わなければならない。このことはハイデガーに依れば直截に次の如く言える。「形而上学は、存在

者としての存在者全体を思考するという点において、存在者をディフェレンツに因る相異に注目して表象するが、ディフェレンツとしてのディフェレンツに注意を払うことはない」(『同一性と差別』六二頁以下)。

形而上学は何故に存在論にして神論であるのか。この問題は、形而上学における存在論と神論との統一根拠は何処に求められるべきか、という問いになる。端的にいえば、存在—神論の成立根拠の問題である。その存在—神論の内において存在と存在者はどのように捉えられているかを略述した訳であるが、この際「存在—神論」は二重襲に基づくことを提示しておいた。その二重襲ということをも存立せしめているのは何であろうか。存在者の根拠としての存在と、根拠づけられてあり—根拠を与えてあるものとしての存在者を相互に保持し遂行するところの 아우ストラーク(耐任)が、二重襲を存立せしめているのである。そうして、形而上学が「存在論にして、神論」として成り立っているのは、正しくそこにおいてなのである。すなわち「形而上学の思惟は、そのものとして思惟されざる差別の内へ入り込んでいくが故に、形而上学は耐任ワウツラークという一つに結びつける統一作用からみて、まさに存在論と神論とは統一されているのである。形而上学の存在—神論的構制は差別の統理に基づいている」(同上)からである。しかしながら、この問題はなお幾つかの吟味さるべき事柄を含んでいるように思われる。その内の一つ。形而上学の根拠を問題にするような思惟はそれ自身形而上学的思惟ではなくして、そういうことをその根底から問いに化するような思惟であり、遂には形而上

学の克服を企図するのであるから、「最初の一步で以ってあらゆる存在論の境域を見棄てしまっている」（『道標』二〇九頁）。とすれば、そのような思惟や問いは「形而上学」とは無関係に別個

に遂行されるのであろうか。これ以上論究することもしかし、今ここでは紙幅などの制約上割愛し、別稿に委ねなければならぬ。